

デショウカ文の用法について

瓜 生 佳 代

要旨

本稿は、デショウカ文の用法を広く集めて整理した記述的基礎研究である。通常あまり取り上げられない受け手発話のデショウカ文や、聞き手に働きかける場合のデショウカ文も含め、その全体の用法を概観した。さらに、しばしば議論の対象となる、話し手に情報がない場合のデショウカ文について、新たに話し手の判断のありなしという観点を入れ、聞き手情報のありなしと聞き手への問いかけ性、そしてデショウカ文が何をたずねたり述べ立てたりしているのかということの関係を整理して示した。

キーワード：デショウカ文、情報、判断、問いかけ性

1. はじめに

疑問助辞カを用いた疑問文には(1)のように断定形にカをつけたものと、(2)のように推量形にカをつけたものがある。

- (1) あの子たち、どこに泊まっているんですか。
- (2) あの子たち、どこに泊まっているのでしょうか。

通常、聞き手がそのことを知っていると思ってたずねる場合は(1)のように断定形を、聞き手が知らないかもしれないと思っている場合は(2)のように推量形を用いる。一方、(3)のように聞き手が知っているわかっている場合にも「推量形+カ」の形が用いられることがある。この場合は、推量形を用いることによって聞き手に対する丁寧さが示される。

- (3) あとで連絡を入れたいのですが、あの子たち、どこに泊まっているのでしょうか。

デショウカの意味機能の検討は、まず普通体のダロウカから始められることが多い。例えば三宅(1993)ではダロウカの基本的意味を「話し手の想像の中で、命題の真偽が不確定であると認識する」とし、聞き手が存在するという条件のもとで、聞き手が情報を有しているかどうかによって、「丁寧さの加わった質問」と「弱い質問」（聞き手に不確定な応答をする余地を残す質問）という派生的意味が生じるとしている。また、牧原(1994)では、デショウカはダロウカが丁寧化されたもので、丁寧化されることによってダロウカの持つ自問自答の意味が排除され、間接的な情報要求という語用論的機能を専門に担うようになったものとしている。

本稿は、このような先行研究の見解に異をとらえるものではない。本稿の目的はデショウカの意味機能を見る前段階として、デショウカの用法をもっと幅広く概観し、整理することである。デショウカ文（デショウカを用いた文をここではこう呼ぶことにする）については、上の(2)(3)のような用例、すなわち聞き手に問いかけるものが圧倒的に多くとりあげられている。一方、(4)のように聞き手に働きかける場合のデショウカ文は考察の対象からはずされることが多い。

(4) このホテルなどはいかがでしょうか。

また、(5)のように、聞き手への問いかけ性が弱く、むしろ話し手の判断を表出しているような場合¹⁾も、あまり詳しく検討されてはいない。

(5) あの子たち、このホテルに泊まってるんでしょうか。荷物が置いてありますよね。

目の前に聞き手が存在する場合には、ダロウカ文よりもデショウカ文を用いるほうが基本的な用法だといえる。そこで本稿では、デショウカ文のみに焦点をしばり、デショウカ文が談話においてどういった機能をはたしているのか、その用法を記述的に整理したいと思う。そうすることで、デショウカの本質的な意味機能を検討する場合でも、全体の場合のどの用法について検討しているのか、わかりやすくなるからである。また、デショウカ文で問いかけたり述べ立てたりしている場合、何をたずねたり、述べ立てたりしているのかも詳しく見ていくことにする。

2. デショウカ文の用法

まず、デショウカ文を大きく先手発話と受け手発話とに分けて見ていくことにした。(6)のAのようにある話題を先に差し出す発話を先手発話、(7)Bのように差し出された1つの話題に応答する発話を受け手発話とする。

(6) A: これを書いたのは山田さんでしょうか。← 先手発話

B: さあ。

(7) A: これを書いたのは山田さんですよね。

B: えっ、そうでしょうか。← 受け手発話

次に、受け手発話、先手発話それぞれについて、A. 聞き手に問いかける場合、B. 聞き手に伝える場合、C. 聞き手に働きかける場合について見ていった。AとBの場合については、話し手、聞き手両者に情報があるかどうかとも考慮した。その結果、以下のようにデショウカ文の用法が整理された。

I 先手発話の場合

A. 聞き手に問いかける場合

- A-1 聞き手の推量をたずねる (話し手、聞き手ともに情報なし)
- A-2 話し手の推量に対する聞き手の意見をたずねる (話し手、聞き手ともに情報なし)
- A-3 聞き手の情報を求める (話し手情報なし、聞き手情報あり)
- A-4 話し手の推量が正しいかどうか確認する (話し手情報なし、聞き手情報あり)
- A-5 クイズ的に質問する (話し手情報あり、聞き手情報不明)
- A-6 聞き手の判断(アドバイスなど)を求める
- A-7 聞き手に許可や承認を求める
 - a. 普通に求める
 - b. 反語的に求める

B. 聞き手に伝える場合

- B-1 話し手の疑問を伝える (話し手情報なし、聞き手情報なし)
- B-2 話し手の推量を伝える (話し手情報なし、聞き手情報なし)
 - a. 普通に伝える
 - b. 反語的に伝える
- B-3 話し手の意見を反語的に主張する

- C. 聞き手に働きかける場合
- C-1 聞き手に依頼する
- C-2 聞き手に勧める／提案する

II 受け手発話の場合

- A. 聞き手に問いかける場合
 - A-1 先手発話の内容を確認する
 - A-2 先手発話に反応して質問する
- B. 聞き手に伝える場合
 - B-1 先手の質問に答える
 - a. 話し手の情報・判断を伝える（話し手情報あり、聞き手情報なし）
 - b. 情報がない／判断できないことを表明する（話し手情報なし、聞き手情報なし）
 - B-2 先手発話に対して疑問、疑念等を表明する
- C. 聞き手に働きかける場合
 - C-1 問いかけに答えて、聞き手に勧める／提案する

*話し手、聞き手の情報のありなしが関係する場合のみ（ ）にそれを示している。

以下、それぞれの用例を示す。

I 先手発話の場合

I. A 聞き手に問いかける場合

デショウカ文は文の形としても疑問文なので、聞き手に問いかけ、たずねる用法が最も基本的だといえる。

I. A-1 聞き手の推量をたずねる

話し手は情報をもっておらず、また聞き手にも情報のないことを知っている場合である。聞き手に情報がないことを知ってたずねているのだから、聞き手の推量をたずねることになる。

- (8) [鐘の音を聞いて窓から外を見ると、火事で空が明るい]

「こんな夏になにが原因で火が出たのでしょうか」

(略)「つけ火かな」志方が言った。

(花埋み)

- (9) [自分たちをモデルにした小説を読んで、だれがだれのモデルになったか話題にしている場面。みんな確実な答は持っていない]

料理長：やさしい料理長ってのは出てないか。(笑)

女1：ちゃんとのってます、ほら。

料理長：ほんと。あー、のってる、のってる。はー。

男：さて、じゃあ、このきれいなフロント(?)はだれでしょうか。

女1：あら、私かしら。

女2：エクスキューズミー、私です。

(?)は聞き取れなかった部分 (ホテル)

- (10) [ジョバンニたちは、天の川の水がはねあがり、大きな鮭や鱒が空中に抛り出されるのを見た]

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に」

「小さなお魚もいるのでしょうか。」女の子が談につり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだからいま小さいの見えな

かったねえ。」

(銀河鉄道)

(8)では火事の原因、(9)では「きれいなフロントとして描かれているのは誰か」、(10)では「小さな魚もいるかどうか」についての聞き手の推量をたずねている。(10)の場合、話し手は大きな魚がいるのを見て単に小さい魚もいるのかわかると疑問に思っただけで、「小さい魚もいるのだろう」という判断はしていないものと思われる。

I. A-2 話し手の推量に対する聞き手の意見をたずねる

この場合も話し手、聞き手双方に情報はないが、A-1と異なるのは話し手は話し手なりの判断を下しており、単に聞き手の推量をたずねるのではなく、話し手自身の判断を伝えた上でそれに対する聞き手の反応を求めていることである。

(11) [僕と矢須子は水の中を歩いていた]

砂礫の洲のところに、両手を突いて水を飲んでいる人がいた。こちらも水を飲んでやろうと思って近づくと、水を飲んでいるのではなくて、伏せて水に顔をつけたまま死んでいる。

「この川の水、飲んでは毒なんじゃないか」と矢須子が、僕の聞きたいことを云った。

「どうだか、わからん。しかし、飲まぬほうがよいかもしれん」

(黒い雨)

(12) [僕たちは、道ばたの石に腰をかけた。そこは大牟呂さんの自宅の門前だった。大牟呂さんの邸宅はすっかり焼け失せていた]

「おい、その石は、大牟呂さんのうちの庭石らしいよ」(略)

「その石、御影石だからな。今朝がたまで、青苔で包まれておった石だろう」

「大牟呂さんのお宅、みなさん全滅なんじゃないか」

(黒い雨)

(11)の場合、水に顔を伏せて死んでいる人を見て川の水を飲んで死んだのかと思った話し手が「この川の水は飲んでは毒なのかもしれない」と判断し、その判断について聞き手がどう思うのかたずねている。(12)の場合も、焼け失せた大牟呂さんの家を見て、みんな全滅したのではないかと話し手が判断している。

I. A-3 聞き手の情報を求める

話し手に情報がなく、聞き手に情報があることを話し手が知っている場合を見してみる。

(13) [葬儀屋の明子のところへ問い合わせの電話がかかってきた]

「あの、警察で聞いてもらったなら、そちらで、松井の葬儀をして下さるということですが・・・」

「はい、そうでございます」明子は緊張した声で答えた。

「お葬式の予定はどうなっているんでしょうか？私も出席したいので」

「はい、明日の夜が仮通夜で、(略)」

(毎月)

(14) 瀬見：夏子さんに会いたいです、こちらに来てはいないでしょうか。

沢木：いませんな。

瀬見：行先、ご存知ないでしょうか。

沢木：僕は、貴方のところへも行っているかと思っただ。

瀬見：まさか。

(その人)

(15) 健一：…うまくいったのかよ？

絃子：えっ？

健一：どっから声出してんだよ。あいつとうまくいったのかよ。

絃子：あいつとやってやめてよ。

健一：あのお方とうまくいってらっしゃるんでしょか。

(愛して)

情報をもたない話し手が聞き手に情報を求めている、最も典型的な質問文の用法である。聞き手に事実としての回答

を求めている点では「断定形+カ」と同じだが、推量形を用いたほうがより丁寧な言い方となる。特に(15)の例では、同じ意味のことを丁寧な形で言い換えており、断定形と推量形の疑問文の丁寧さの違いが顕著である。

一方以下の例は、聞き手に情報があるかどうか確かではない場合である。

(16) [遠くの空に茸雲が見える]

「あの雲のこと、みなは何雲と云うとるんですか。何雲でしょうか」

「何雲ですかなあ。鉄橋の手前の人たちのなかに、ムクリコクリの雲と云うとる人がおりました。ほんま、ムクリコクリでがんすなあ。(略)」

(黒い雨)

(17) 良子：梨田さんは、絵里子の死んだ時刻にアリバイはあるんでしょうか。

明子：さあ、きかなかったわ。

(灰色)

(16)は、最初は断定形でたずねており、はっきりした解答を求めているのであるが、もしかしたら聞き手が知らないかもしれないと思ったのか、推量形でたずねなおしている。(17)の明子は葬儀屋であり、しばしばなじみの警部と殺人事件について話している。そのことを知っている話し手が、聞き手に情報があるかもしれないと思ってたずねている場面である。これらの場合、話し手が求めているのは聞き手の持つ情報であるが、もし聞き手に情報がなければ聞き手の推量をたずねようとしている。話し手自身は判断をくだしていない。

I. A-4 話し手の推量が正しいかどうか確める

話し手に情報は無いが、話し手なりに判断し、情報を持つ聞き手にその判断を差し出して、それが正しいかどうか問うものである。

(18) 里村：あの、これ、お宅の猫でしょうか。… お宅の前の道で寝てるところをはねちやったもので…。

恭子：まあ… ひょっとして、犬猫病院へつれていってくださったんですか。

(ひとめ)

(19) [「僕たち」は能島の雇船に便乗させてもらうことになり、一緒に、御幸橋の川下へ向かった。が、待っているはずの船の姿が見えない]

「どうしたんだろう」と能島さんはちょっとまごついた風で舌打ちをした。(略)

「あのチャッカー船でしょうか」と僕は、川下に見える船を指差した。

「いや、違います。あれは水船になっています。草津の船は二噸半の和船です。(略)」

(黒い雨)

(20) [杉山医師は带状疱疹の藤原を自宅に預かっている。太郎がお見舞いに行ったら、杉山医師は、藤原を預かったことが、却って藤原の両親の気分を害したのではないかと心配していた]

「そう言われるのは、藤原家からこちらに、お礼の挨拶や電話がないからでしょうか」「まあ、言ってみればそうなんですがね。(略)」

(太郎)

(18)では、猫がその家の前で寝ていたことからその家の猫ではないかと、(19)ではちょうど川下に船が見えるのでそれが待っているはずの船ではないかと、(20)では医師が心配しているのは、両親からのお礼の挨拶や電話がないからではないかと、それぞれ話し手が仮の判断をくだしている。これらの場合、聞き手に情報があることを知っているのに、自分の判断の正しさを確めることになる。

一方、話し手には聞き手に情報があるかどうか不明の場合もある。その場合は、聞き手に情報があれば、事実を教えてもらって自分の推量が正しいかどうかを確めることになるし、情報がなければ、自分の推量を知らせてそれに対して聞き手がどう思うかをたずねることになる。以下の2例は聞き手に情報があるかどうかわからない場合の例である。

(21) [やぐらの上に旗をもった男がいる。男が旗をふり、「いまこそわたれわたり鳥」というと、わたり鳥がいっせいに空をかけた]

「あの人鳥へ教えてるんでしょうか」女の子がそっとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きっとどこからかのろしがあがるためでしょう」カムパネルラが少しおぼつかなそうに答えました。

(銀河鉄道)

- (22) [矢須子の手には何かコールドタオルのようなものがついている。能島の手にも同じようなものがついているのを見て、「僕」はそれが毒瓦斯ではないかと心配になった]

「毒瓦斯でしょうか」と訊ねると、「いや、毒瓦斯じゃありません」と能島さんが、(略) 云った。 (黒い雨)

I. A-5 クイズ的に質問する

これは、話し手に情報がある場合だが、話し手に情報がある場合で聞き手にたずねるデショウカ文の用法は限られている。聞き手にたずねる場合は、聞き手に知識、情報があるかどうか、そしてそれが正しいかどうかを知るための質問、あるいは聞き手がどのように推量するかを知るために用いられる質問となる²⁾。話し手は聞き手が知っていることを期待している場合もそうでない場合もある。クイズなどでよく使われる用法である。

- (23) [テレビのクイズ番組で]

司会：ミャンマーのお寺では朝このタマリンドの枝を使った仏像にあることをします。それは仏像を生きているもののように大切に扱っていることからするものですが、いったい何をするのでしょうか (世界)

I. A-6 聞き手の判断（アドバイスなど）を求める

情報を持つ、持たないというよりも、聞き手のほうが自分よりよりよい判断ができると話し手が思っている場合である。話し手は聞き手の判断をたずね、それを自分のこれからの行為の参考にしようとしている。

- (24) [太郎は家庭教師先の子がよく勉強してるのに驚いている]

「(略)、ずいぶん成績よくなっちゃうよ、きっと。英語の基礎のできてないのがいけないけどね」

「今から、やったら、遅いでしょうか」

「僕もね、実はそれやったのよ。後遺症ないわけじゃないけど、まあ、何とかならないではない」 (太郎)

- (25) 貴子：とりあえず教授のかたにご挨拶代わりにつもりで商品券でもと存じまして・・・。

啓子：あら、いけませんわ、そんなことなさっちゃあ・・・。

貴子：失礼でしょうか。

啓子：初対面のかたからそんなものをお受け取りになれるはずがごさいませんでしょう。 (お入学)

この他、「私はどうしたらいいのでしょうか」などの形で聞き手からのアドバイスを求める場合もここに入る。

I. A-7 聞き手に許可や承認を求める

(26)では普通に、(27)では反語的に聞き手の許可を求めている。

- (26) 君子：やっぱりあなたにはお話ししておいたほうがいいようですね。

直枝：？

君子：ちょっとお邪魔させていただきますわ。よろしいでしょうか。 (お入学)

- (27) 美保：ねえ、だめでしょうか。お母さま。お願いしますわ。できたらお父さまも写真に出てくださいねば・・・。

信子：わたしたちは遠慮しますよ。 (凧)

I. B 聞き手に伝える場合

次はデショウカ文を用いて、聞き手に話し手の疑問や推量、判断、意見などを伝える場合である。

I. B-1 話し手の疑問を伝える

話し手にも聞き手にも情報のない場合である。話し手は自分が疑問に思うことを聞き手に伝えているだけで、積極的に聞き手の反応を求めているわけではない。

- (28) [瀬見は夏子を呼び出してくれるように旅館の女中に頼んだ。女中はまもなく戻ってきて言った]
「どこにいらしたのでしょうか、お部屋にお見えにならないのですが」 (その人)
- (29) 良子：携帯電話ですけど、どうして絵里子が死ぬ直前に持っていたんでしょうか。犯人に殺されると思って、110番しようとしたのかも。 (灰色)
- (30) [妻は旅行に行くという良人に、旅先で悪いことをしないと約束させようとした。面倒になった良人は、旅行をやめると言い出す]
「悪かったわ。折角思い立ちになったんですからおいで遊ばせ。そうして頂戴」
「うるさい奴だな、もうやめると決めたんだ」
「……赤城にいらっしゃらない？ 赤城なら私本当に何とも思いませんわ。紅葉はもう過ぎたでしょうか」
「うるさい。もうよせ」 (好人物)

(28)では、話し手の疑問に答えるための判断材料を聞き手よりもむしろ話し手自身のほうがより多く有しており、聞き手の推量を求めることに意味がないので、聞き手にはまったく問いかけていない。(29)の場合は疑問を前置的に提示し、続けて自分の推量を述べ立てている。(30)では疑問詞は使われておらず、「紅葉が過ぎたかどうか」という疑問を差し出しているのであるが、話し手は良人の関心を赤城のほうへ引き付けるために赤城の紅葉の話題を出しているのであり、紅葉が過ぎたかどうかを真剣に討議するつもりはない。紅葉がすぎていなければいいかという気持ちを出しているものである。

I. B-2 話し手の推量を伝える

話し手にも聞き手にも情報がないが、話し手が何らかの判断をしている場合の用法である。次の(31)(32)(33)の用例は聞き手に話し手の判断を知らせる気持ちが強い。

- (31) [プールに落ちて大けがをした木谷のことを当時担任だった浜口にたずねている場面。木谷は自分から飛び込んだらしい]
「で、木谷君自身はどう言っていますの。落ちた時のことを」
「その前後の記憶をまったく失っています。ぼくが病院へ見舞いに行った時などは、ショックで何も話せない状態でした」(略)
「ぼくが想像するに、ま、軽いノイローゼでもあったのでしょうか。ちょうど学年末テストが近づいていましたからね」
「あら。お仕事お邪魔しました」 (エディプス)
- (32) 明子：九時に遺体が発見されたというと、家の方にも連絡があって、今の時間では家族の人は、現場に駆けつけているでしょう。
良子：松井さんは別荘に一人でいたんでしょうか。家族が一緒だったら、死後十二時間も気付かないということはありませんねえ。 (毎月)
- (33) 明子：多那瀬さんは今日帰ってくるんですね。でも、本当に彼が犯人でしょうか。実は、リサが、節子があやしいというんです。 (乱数表)

(33)の例は、彼が犯人だということへの疑いを表明するだけでなく、「彼は犯人ではないのではないか」という話し手の判断を反語的に伝えているものと考えられる。

I. B-3 話し手の意見を反語的に主張する

- (34) [加藤を山岳会に入れるかどうか話している]
「きみだって、加藤を神港山岳会に引っぱりこもうとして、結局あきらめたのは加藤をもっと広い世界に放してやろうと思ったからだろう」藤沢久造に聞き直してそう言われると、外山は返答に窮した。

「だが、加藤を、どこの山岳会にも入れずに放って置いていいものでしょうか? やはり、どこかの山岳会に入れてしまないと」 (孤高)

(35) 伊木: 先生、ぼくは明治の御代の人間です。キリストがはりつけにされたのは、千何百年も前のことではありませんか。どうして明治生まれのぼくが、キリストを十字架にかけたなどと思えるでしょうか。 (塩狩峠)

(34)は、「加藤を放って置いてはいけない」、(35)の場合は「思えるわけがない」という話し手の気持ちを反語的に述べている。話し手が聞き手の情報のありなしを考えてというより、当然聞き手もそう考えるだろうと想定して述べているものである。

I. C. 聞き手に働きかける場合

働きかけの場合は話し手、聞き手の情報は関係がない。断定形と比べ、推量形を使うことで丁寧さが増している。

I. C-1 聞き手に依頼する

(36) 圭子: あの・・通りすがりのものですが・・山村圭子と申しますが・・。すみません、お水を一杯、頂けないでしょうか。

女 : お水? (ひとめ)

I. C-2 聞き手に勧める/提案する

(37) 「お母さんに、もうすこしお手紙をだしてあげたら如何でしょうか」厚子が遠慮がちに言った。

「あなたが困るのですね」「はい……」厚子は再び膝に目をおとした。 (冬の旅)

では、次に受け手発話の場合について見ていく。

II 受け手発話の場合

II. A 聞き手に問いかける場合

II. A-1 先手発話の内容を確認する

先手発話の中の不明な部分に関して、自分の解釈が正しいかどうかを確認するものである。

(38) 「お宅の車を見せて戴きたいのですが」とその刑事は言った。

「車と申しますと、会社の車でしょうか」

「いや、宇野修一郎さんが乗っているムスタングという車です」 (冬の旅)

II. A-2 先手発話に反応して質問する

(39) 「(略) 実際この社会には男子より女子に向いたと思われる職業が沢山あります」

「ほう、何でしょうか」「まず第一に教師です。(略)」

(花埋み)

この他、名前を呼ばれて「はい、何でしょうか」といった応答もここに入る。

II. B 聞き手に伝える場合

II. B-1 先手の質問に答える

(40) [殺人事件の起こった別荘で刑事が滞在者にたずねている]

「この別荘へは、ちよくちよく誰かが来ておられるのですか」

「いや、それほどでもないと思います。夏のシーズン中は二、三回も使うでしょうか。正月には、毎年親戚縁者が集まる習慣があるのですが、ほかの別荘へ行く場合もありますから (略)」 (W)

(41) [刑事が駅員に事件に関係のありそうな男女をみかけなかったかたずねている]

「どうも思いだしません。(略) それに、ここは始発だから、改札が開くと同時に、乗客がつづいてホームにはい

るのです」

「でも、あの時刻は、そう客は混んでいなかったでしょう？」

「そう。三四十人ぐらいだったでしょうか。いつもそのくらいです」

(点と線)

- (42) [容疑者摩子の逮捕を望んでいる者は誰かという話題で刑事二人が話している]

「そうした不利益をこうむっても、なお摩子の犯行を露顕させたいと願う者はなかったらうか」

「さあ…強いていえば、みねでしょうか」

「みね？」中里は意外な思いで訊き返した。

(W)

- (43) 明子：そのことを絵里子さんの夫の梨田さんは知っているのかしら。

良子：さあ、どうでしょうか。絵里子は、お父さんと一緒に、生まれたときから住んでいた家なので、なかなか売る決心はつかなかったみたいですね。

(灰色)

(40)(41)は話し手に情報がある場合である。推量形を使うことで、話し手が思い出しながら、あるいは考えながら答えているニュアンスを出している。また、数字に確信が持てず、推量形を用いているとも考えられる。(42)は、話し手に情報はないが、自分の推量を差し出している。(43)の場合は、「どうでしょうか」という決まり文句で、自分が答えを持たないことを表明している。

II. B-2 先手発話に対して疑問、疑念等を表明する

- (44) [知り合いのボクサーの移籍について話している]

「でも……移籍をするといっても……そんなに簡単じゃないし……」私が小さく呟くと、金子がそれを耳にとめたらしく、言った。

「そうでもないと思うよ」

「……………」

「金さえ出せば、できないことじゃないよ」

「そうでしょうか。かなり大変だという話ですけど……」

(一瞬)

- (45) [「ハーメルンの笛吹き男」について話している]

キートン：笛吹き男はジプシーだった。

ミハエル：それは間違いない。彼は中世の楽師だった。

キートン：本当に楽師だったんでしょうか。

ミハエル：え？

(マスター)

先手の差し出す事実に疑問を感じていることや、先手の考え方に同意できないことを表明する場合である。「そうでしょうか」「それは本当でしょうか」「本当に…でしょうか」などの形で用いられる。

また、疑いを持ちながらもあいづち的に先手発話を受け入れる次のような用法もある。

- (46) [引越しの荷物運びが終わったところ。太郎は荷物運びを手伝おうとしたが全然役に立たなかった]

「兄ちゃん、何か運動してるの？」

「はあ、槍と百米です。でも、ああいうスポーツは、こういう時にちっとも役に立たないですね」

「なあに、ちょっと練習すりゃ、他の人より早くうまくなるよ。こつだからね」

「そうでしょうか」

「さあ、甘酒、上って下さいね」母はコーヒー茶碗にスプーンをそえてさし出した。

(太郎)

II. C 聞き手に働きかける場合

II. C-1 問いかけに答えて聞き手に勧める／提案する

先手にアドバイスなどを求められた時に、「それでは…ではいかがでしょうか」などの形で勧めたり、提案したりす

る用法である。

3. まとめ

以上、さまざまなデショウカ文の用法を概観した。デショウカ文が問いかけや述べ立てのはたらきをする場合、何をたずね、何を伝えているのかは、主に聞き手の情報のありなし、話し手の判断のありなしにかかわっていることがわかった。話し手に情報がない場合について、その3つのかかわりを表1にまとめて示す。この表では、聞き手情報について、話し手が聞き手に情報がないと思っている場合、情報があるかどうかわからない場合、情報があると思っている場合の3つに分けている。それぞれ用例の一部もいっしょにのせた。()は用例の番号である。

表1 デショウカ文の用法 (話し手に情報がない場合)

聞き手情報	話し手の判断		
	問いかけ性		
聞き手に情報なし	問いかけ性 弱い	話し手の疑問を伝える (28) どこにいらしたのでしょうか (30) 紅葉はもう過ぎたのでしょうか	話し手に未確定判断あり 話し手の推量を伝える (31) ノイローゼでもあったのでしょうか (32) 別荘に一人でいたのでしょうか
	問いかけ性 強い	聞き手の推量をたずねる (8) 何が原因で火が出たのでしょうか (10) 小さなお魚もいるのでしょうか	話し手の推量に対する聞き手の意見をたずねる (11) この川の水、飲んでは毒なのでしょうか (12) みなさん全滅なのでしょうか
聞き手情報不明	問いかけ性 弱い		
	問いかけ性 強い	聞き手が知っているなら情報を求め、知らなければ聞き手の推量をたずねる (16) 何雲でしょうか (17) アリバイはあるのでしょうか	聞き手が知っているなら情報を求め、知らなければ話し手の推量に対する聞き手の意見をたずねる (21) あの鳥へ教えてるのでしょうか (22) 毒瓦斯でしょうか
聞き手に情報あり	問いかけ性 弱い		
	問いかけ性 強い	聞き手の情報を求める (13) 予定はどうなっているのでしょうか (14) こちらに来てはいないのでしょうか	話し手の推量が正しいかどうかを確かめる (19) あのチャッカー船でしょうか (20) お札の挨拶がないからでしょうか

一方、情報のありなしに関係のないのは働きかけの用法であった。また、反語的表現によって自分の意見を主張する場合も基本的に聞き手の情報はあまり関係しない。話し手は聞き手もそう考えて当然だという姿勢で発話するからである。また、差し出す内容も「実際そんなことができるのでしょうか」「学校ってものがあんなんでいいのでしょうか」など可能性判断、価値判断、評価などに関わるものの場合、情報のありなしという基準では考えにくい。今回情報のありなしを問題にした部分では、聞き手の情報のありなしとのかかわりを詳しく見るために、用例の多くを情報があるあるいはないと無理なくいえるもの、つまり客観的事実を問題にするものにできるだけそろえた。差し出す内容が客観的事実を問題にするものでない場合は、「話し手が聞き手に情報があると思っているかどうか」というより、「話し手が聞き手が話し手より適切な判断をくだせるとみなしているかどうか」ということが基準となる。

本稿は、これまであまり扱われてこなかった受け手発話なども含め、あまり考慮されていなかった話し手の判断のありなしも考えながら、広い範囲のデショウカ文の用法を整理したもので、記述的な基礎研究として位置づけられるもの

である。断定形と推量形の機能の違い、カの表す意味、デショウ／デショウカ／デショウネ／デショウカネ／などの用法の違いを見る上でも、1つの資料とすることができる。また、日本語教育においても、中上級の学習者に冒頭の3、4例以上の用法を伝える必要ができたとき、教師にとっての参考資料となるだろう。一方、日本語教育にとっては、本稿で触れなかった情動的なニュアンス、たとえば期待や恐れ、驚き、感嘆などを表すデショウカ文も重要であり、それらを整理しておくことも必要である。それは今後の課題としたい。

注

1. 「このホテルに泊まってるんじゃないでしょうか」の形になると、話し手の自分の判断に対する疑いがなくなりすでに確定した話し手の判断の述べてとして機能するようになる。ここでは、この「ノデハナイデショウカ」の形は考察の対象から外している。
2. このクイズ的な質問の他に、以下のように前置き的に問題を提示し聞き手の思考を促す用法もある。しかしこれは講演などある程度話し手の発話が長く続く場合に用いられることが多いので、本稿では特に取り上げなかった。

[多文化の共生についての講演で]

いま、世界中から、みんな片言の英語しかできない若者たちが、どこかの地で一緒に3週間、植林の仕事をするようになったとします。彼らはいったいどのように仕事をすすめていくでしょうか。同じ国から来た人や、同じ民族ごとに作業グループができていく、そう思われる方が多いんじゃないでしょうか。(CNB)

参考文献

- 井島正博. 1994. 「推量文の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』29.
- 奥田靖雄. 1984. 「おしはかり (一)」『日本語学』3-12.
- 尾上圭介. 1991. 「推量と疑問」『平成3年度国語学会秋季大会発表要旨集』
- 田野村忠温. 1991. 「疑問文における肯定と否定」『国語学』164.
- 仁田義雄. 1997. 「「伊達さん、結婚するだろうか」ー<問いかけ>と<疑いの表明>」『言語』26-2.
- 牧原 功. 1994. 「間接的な質問文の意味と機能ーダロウカ、デショウカについてー」『筑波応用言語学研究』1.
- 宮地 裕. 1951. 「疑問表現をめぐって」『国語国文』20-7.
- 森山卓郎. 1992. 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101.
- 山口堯二. 1989. 「疑問表現の推量語」『国語と国文学』66-7.

例文出典

(毎月「毎月の脅迫者」、(乱数表)「殺しの乱数表」、(灰色)「灰色の容疑者」『毎月の脅迫者』山村美紗／(花埋み)『花埋み』渡辺淳一／(黒い雨)『黒い雨』井伏鱒二／(銀河鉄道)「銀河鉄道の夜」『銀河鉄道の夜』宮沢賢治／(好人物)「好人物の夫婦」『小僧の神様・城の崎にて』志賀直哉／(太郎)『太郎物語』曾野綾子／(冬の旅)『冬の旅』立原正秋／(エディプス)『エディプスの恋人』筒井康隆／(点と線)『点と線』松本清張／(一瞬)『一瞬の夏』沢木耕太郎／(塩狩峠)『塩狩峠』三浦綾子／(孤高)『孤高の人』新田次郎、以上新潮文庫／(W)『Wの悲劇』夏樹静子／(ひとめ)『ひとめあなたに…』新井素子、以上角川文庫／(その人)『その人の名は言えない』井上靖、文春文庫／(凧)『凧の風景(下)』佐藤愛子、集英社文庫／(お入学)シナリオ『お入学』橋田壽賀子、NHK出版協会／(愛して)シナリオ『愛していると言ってくれ』北川悦吏子、角川書店／(CNB)『国境を越えて』山本富美子、新曜社／(マスター)『MASTER KEATON 5』浦沢直樹他、小学館／(ホテル)『ホテル』TBS テレビドラマ 1995.5.25 放映／(世界)『世界不思議発見』TBS 系テレビ 2003.1.25 放映

